

夏の思い出 ～ホタルとおばあちゃん～

最近、子どもが小学3年生だった頃に書いた文集を見つけました。

「ホタル」

きのうの夜、テレビを見ていたら、

「まさしー、ホタルやでー。はよおいでー。」

とおばあちゃんの声が聞こえたので、いそいでうら口に行ったら、

「アカン、アカン、にげてしまう。」

とおばあちゃんが言ったので、そっとあみをもって、光によせると、8mmぐらいのホタルが、あみについていました。すごくきれいに光っていてうれしくなりました。

「きっと ころらへんに きれいな水があるんやな〜。」

とぼくが言うと、おばあちゃんが、

「まさしは、物知りやな〜。」

と言って、ペットボトルとみかんのネットと、サビサビのカッターナイフで虫かごを作ってくれました。中に地下水を入れて、葉っぱにホタルをのせて、みかんのネットをわゴムでとめて、金魚の池の前におきました。そして、

「きれいやな〜。ふしぎやな〜。」と言いながら二人でじっと見ていました。

ねる前にもう一度、ホタルを見たら元気に光っていました。

次の日、ホタルを見たら、いませんでした。あわててさがしたら、葉っぱの横の方で、動かなくなっていました。かなしかったです。その事をおばあちゃんに言ったら、ぼくの顔をじっと見て、ぼくの頭を何度も何度もなでてくれました。おばあちゃんもだまってかなしい顔をしていました。にがしてあげればよかったです。

でも、本物のホタルを見られて、うれしかったです。

正志は、何でも知りたい、やってみたいという子どもでした。調子に乗りすぎて、よく失敗もしていました。友だちとけんかをして泣きながら帰ってきたこともありましたが、次の日にはケロッとして学校に行きました。中学生のころには反抗期があり、心配した時期もありました。

そんな正志の作文を読み返して、今さらながら気づいたことがありました。それは、いつも正志の近くにおばあちゃんがいってくれたということです。きれいに光るホタルを見つけて、教えてくれたおばあちゃん。虫かごを作り、一緒にホタルを眺めてくれたおばあちゃん。ホタルの死と一緒に悲しんでくれたおばあちゃん……

そう言えば私に対しても母は、同じだったような気がします。子どもの頃、朝は、どんなに忙しくても決まって「いってらっしゃい」と元気に送り出してくれました。また、夜には、私をどんなにきつく叱った後でも、寝る前には「おやすみ」とやさしく声をかけてくれました。あまり口数の多い人ではありませんでしたが、何とも言えないやわらかい空気に包まれていたような気が、今でもしています。

正志の作文を読みながら、日常生活でのちょっとした会話や、思いを分かち合うことの積み重ねが、子どもの安定につながり、成長につながっていくということを、改めて教えてもらいました。

もうすぐ夏休みがやってきます。特別なことはできませんが、正志の顔をじっくり見て、正志の声をじっくり聴いて、一緒に過ごせる時間を大切にしていきたいと思います。